
少なくとも私は望んでいない。

茅野春葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少なくとも私は望んでいない。

【Nコード】

N8902U

【作者名】

茅野春葵

【あらすじ】

目が覚めるとそこは見覚えのない場所だった。そして横には見覚えのない人……。いや、ちょっと待て。なんかどこかで見た事ある。直接じゃないけど、写真とかそんなものでごく最近　って!?!?この人、ちょお待て、待て私!?!友から借りたゲームのパケ絵と瓜二つとか笑えない、笑えないって!?!

気がついたら乙女ゲーの世界に居たって、どんな嫌がらせだっ!?!?

・ 1 (前書き)

突発的に書きたくなりました。

乙女ゲーの癖に恋愛要素は皆無です。逆ハーもあります。期待した方、ごめんなさい。

「あいたたた……」

側頭部の奥がズキンズキンと痛みを訴えているので、思わず声を
出してしまった。

なんていうか、切った時に「いたっ！」って思わず叫ぶ条件反射と
一緒です。

とりあえず身体を起こして痛みが治まるように、こめかみをぐり
ぐりとゆっくり優しく撫でる。

側頭部の奥だから効くかどうか怪しかったけど、どうやら問題なか
ったみたい。

痛みもかなり治まってきた。

とりあえず……。コーヒーでも飲んで一息つくのかな。そう思っ
て部屋を出ようとしたんだけど。

なんかおかしい。

ちよつと待つて、ちよつと待つて。

いやいやいや……。

とりあえず、目を瞑って深呼吸しよう。

「スー、ハー、スー……。ハー……」

心の準備はいいかい、私？ 大丈夫大丈夫、落ち着けー、落ち着
けー。

よ、よーし。目を開けるよ、開けるよー。三・二・一。

……。

う、うん。もう一回目を瞑って深呼吸しようかな？

はい、落ち着けー。落ち着けー。

ゆーっくり、ゆーっくり目を開けようね。怖いことなんかないさ。そう思っただけで目を開けようとしたんだけど、物凄い音が突如聞こえたものだから、条件反射で思わずバッチリと目を開けてしまった。

そこには、先程までと全く変わらない内装の部屋があつた。勿論、セオリーというかなんというか、見覚えはない。

いや、一点だけ変わった事がある。
この部屋の入り口兼出口のドアのところに、物凄い形相をした男の人が立っていた事だろう。

多分、さっきの物凄い音を立てた人物だと思っただけ……。
えっと、この状況はなんでしょうか？ 私、不法侵入って事になるのだろうか。

……。

なるよねえ、なっちゃうよね！？

いや、でも私の意志ではなく、ですね。気付いたら此処にいたわけですし、それでもやっぱり不法侵入になります、よねえ……。

ちょ、マジ困るっ！

仕事、仕事に支障がっ！！ 下手したら、いや下手しなくても解雇されちゃうっ！？

お、お兄さん、私の話を聞いてですね、出来れば穏便にすませていただけないでしょうか。

いや、十分勝手な話だとは思うんですけど、でも私の話も聞いてですね、慈悲を、慈悲をいただけないでしょうか！
あの、そんな怖い顔で私を見ないでいただけると……。
勿論、そちらにとつては私は加害者というか、不審者といえますか。仕方ない事とは分かっているんですけど……。

あー、えーっと……。

なんて声をかければいいのか、言葉は音とはならず頭に中でぐるぐると回るだけ。

分かっている、分かっている。

混乱しているって自分でも分かっているけど、だからといってどうしようもない。

混乱しているって分かっている事が既に、混乱しているんだから。

駄目だ、もう無理。

こういう時はアレだよ。アレしかないよね。

気絶するか、寝ちゃうしかないよね。

でも、気絶しようと思っただけで気絶できるスキルなんか持ってないから、残されたのは寝るという手段しかない。

とりあえず未だ怖い形相のお兄さんは放置して、ベッドで眠ろう。

現実逃避？

ええ、勿論。

これを現実だと未だに認めていない部分もあるので、寝る。とりあえず寝る。

ベッドもお逃れ向きに私のすぐ後ろにあるし、これは寝ろって事だよ。間違いない。

私は何も見てません。という素振りでいそいそとベッドへと横になった。

お兄さんにじつと見られるのも嫌なので、上掛け布団を頭のでっぺんまで被る。準備万端、後は寝るだけだ。そう思っていたのに……。ガバツと問答無用で布団を捲り上げられ、次いでギュツときつく抱きしめられた。

おおうつ！

これはもしや『確保っ！』って事なのか！？

やっぱり寝るんじゃない、素直に交渉していた方が良かったのか？

初手でミスった？

ギューギューと未だに強く抱きしめてこようとする腕に、ギブギブツ！と心の中で叫びつつ遠い目をしながらそんな事を思った。

ああ、それ以上力を入れられると流石に厳しいんですけど。

苦しすぎて音に出す事すら出来ない言葉は、胸中で呟くのみとなる。

もう、無理だ……。

そう思ったが最後、私の意識は闇の中へと深く沈んでいった。

どういった経緯であれ、自分の望んだ気絶するという状況になったのだから結果から鑑みるに良かった事だったのかもしれない。

あくまでも「しれない」だったけどね。

「あいたたたた……」

ギシギシと嫌な音を立てる身体を不思議に思いつつも、そういえばさっきも似たような事を言っていた気がしたなあと思いながらも上半身を起こす。

あれ？ 私何時の間に寝てたっけ？ なんて思っていたら「おはよう」という男の声がすぐ真横から聞こえた。

条件反射で横へと向こうとする顔を、なんとか押し止める。

ちよーっと待て、ちよーっと待て私。

短大卒業して、就職を機に一人暮らしを始めた私の部屋には同居する人なんかいるはずもなく。

悲しい事に現在は彼氏もないものだから、私の部屋に男の人が訪ねてくることはない。

兄弟もいない一人っ子だし、ましてや男友達を部屋に上げるなんて論外だ。

じゃあ、この、私の真横にいるのは一体誰なんだ！？

絶対見ちゃいけない、見たら間違いなく後悔する！

そう私のシックスセンスが訴えている！

いや、うん、ごめん……。なんとなくノリで思いました。

でも、後悔するのは間違いないって頭で警鐘が鳴り響いているのは事実だ。

こういう場合はどうすれば……。

とりあえず、もう一回寝ようか。うん、そうだそうしよう。幻聴、

幻聴なんだ。

あー、最近繁忙月で仕事忙しかったしなあ。きっと疲れが溜まっていたんだよ。

もう十代の頃のようにはいかないんだよねー。

はふー。と溜息を吐いてもう一度寝ようという体勢に入ろうとしたところで、また声がかかった。

「ごめんな、麻那^{まな}。俺、お前が行き成り倒れたって聞いて、このま
ま目が覚めないんじゃないかって気がしてさ……。生きた心地が全
くなくて。

でも、部屋に着いたら目を覚まして動いている麻那がいて……。
感極まつてって言うか、現実だとちゃんと確かめたくて……。

麻那の温もりを感じたくて、思わず抱きしめたら力加減を間違え
たみたいで……。そのまま気を失っちゃってさ。ごめん、本当にご
めん。

でもな、兄ちゃん本当に心配したんだぞ。このまま麻那まで俺の
前から消えてしまうのかと思ったらさ……。」

とりあえず、何から突っ込んでいいのか分からない言葉が色々と
聞こえたんだけど。

えーっと、麻那は間違いなく私の名前なんだけど私一人っ子だし、
幼馴染も引越しを数回繰り返し返しているからいないし、親戚に私より
年上の男の人はいるけど『兄ちゃん』なんて自分の事を言う人はい
ないし。

全く、まーったく心当たりがありません。

名前なんて、部屋にいるんだったら如何様にも調べられるから、知
り合いだなんて簡単には思いませんよ？

第一、声に聞き覚えがない。

こういう場合、他に考えられるとしたらストーカーとか強盗とか
本当に本当に考えたくないけど強姦とか……。そっちを考えるべき

なんだよね。

……。

自分で考えてんだけどストーリーカーはないな。

残念ながらストーキングされるほど秀でた容姿じゃないし。よく言えは中の上？ 現実見れば中の下より？

あー……。自分でダメージ受けてしまった。そんな場合じゃないと分かってはいるけどね。

そんな状況なのに悲鳴も上げず、じっとしているなんて可笑しいと思うよ。我ながらね。

正直に言おう。

混乱の極みです。

もう、混乱しすぎてどう対処していいんだか。思考は全くまとまらないしね。

そついや、こんな似た様な状況なかったっけ？

いや、やめよう。これ以上深く考えるのはやめよう。より強く警鐘が鳴り響いてるからね。

「なあ、こっち向いてくれよ。本当に悪かったって思ってる……。兄ちゃんに、麻那の顔を見せて？」

そつと優しく私の頬に手を添えて、顔を自分の方へと向けようとしている自称『兄ちゃん』。

でもね？ 絶対向きません。あなたの方へなんか顔向けませんからね。

なので首にぐつと力をいれて抵抗をする。

それに気付いたのだろう、なんとなくだが苦笑した雰囲気伝わっ

てきた。

「ほんとうに麻那は頑固だな。でも兄ちゃんは諦めないから。絶対俺の大好きな麻那の顔を真正面から見てやるんだからな」

ちやかしてそんな事を言ってきた。

おい。そこは対抗意識を燃やさずにそっとしておいて欲しいんですけど？

『兄ちゃん』というなら、もう少し空気読もうよ、ねえ？

そしてそのまま部屋から出てくれたら、なお良しなだけだね

そんな事を考えている最中でも私と『兄ちゃん』の攻防は続いている。

今のところ均衡を保っているけど、これがいつ崩れるか分からない。だって首対手という時点で圧倒的に私が不利だし、それにプラスして男と女という力の強さもあるからね。

なんて考えていたのが駄目だったのか、咄嗟の事に判断できなかった。

『兄ちゃん』はくすりと笑うと、あろう事か私の体の上に跨ってきましたっ！

え、いや、ちょっとっ！？　これって貞操の危機！？

なんてあたふたしてたら顔がぐいっと、自分の意思とは関係ない方向へ動いた。

「あはは！　俺の勝ちー！」

なんて心底嬉しそうに言うのは、件の『兄ちゃん』で……。
そして私はというと、驚きのあまり固まっていた。

そう、驚きのあまり。

『兄ちゃん』は予想通りの全くの面識のない人だったからではなく、あまりのイケメンぶりに、もう一度言おう。

あまりのイケメンぶりに。

こんな人間実在しているのかと言うぐらいのイケメンだった。いや、でもなー。なんとなくだけど見覚えあるんだよね。こんなイケメン一度見たら、記憶に残る筈なんだけどね。うーん……。

考えに没頭していた私が悪かったのだろう。気が付いた時には既に遅く、頬に柔らかい何かがかくつついて離れていた。

その時に聞こえた『チュツ』なんて音は、聞こえてない。ないっしたら、ないんだから！

『兄ちゃん』にキスされてたなんて、そんな事絶対ないんだからね
！！！！

あー……。えーっと……。

色々と言いたいことは山盛りって言うぐらいあるのだけど、現実として捉えたくない出来事とかもあったし……。

まあ、要するに絶賛混乱続行中です！

日本語おかしい？ うん、分かってる、分かってる。

自分で間違い指摘して自分で突っ込むぐらいに混乱している。

なんて現実逃避とばかりに思考に没頭していた私に、また同じ事が起きていた。

頬に押し付けられた柔らかい感触と、少し冷たいソレ。

ただ一つ違っていた事は、その押付けられたものが最初よりも時間が長かった事だろうか。

最初の二倍？ いや、三倍ぐらいの時間だった。

流石にキレてもいいだろう。

っていうか、その資格十分にあると思う。

うら若き乙女とは言えないけども 何せもう二十五だしね

あまりにも女性に対して配慮のない態度いや、行動だと思う。

だから私の怒りは正当なもので、仮に訴えたとしても全くない問題レベルだと思う。

勿論、訴えるなんていう事はしないけれどもここは嚴重に注意しておこう。

そう思った私は、当人へと文句を言うべく顔を横に……ん？ 横？ いや、ちょっと待て私。何かおかしくないか？

私の真正面にいる『兄ちゃん』は、これ以上何か変な事されない

ようとまっすぐ自分の視界へと捉えたままで、それから彼は微動だにしていなかった。

何が嬉しいのか、笑顔を浮かべたまま私を見ていた。

そんな状況で、私の頬にキスをするなんて芸当が出来るだろうか？

いや、出来ない。

なら、一体誰だと言うのだ？

まさかこれ以上、変な人間が増えるというのか……？

「司^{つか}！ お前^{まへ}っ！」

「なーに？ 祐夜^{ゆうや}さん？」

「な、なーにじゃないだろうっ！？ 麻那^{まな}になんて事したんだっ！」

『兄ちゃん』は怒鳴りながら、私の頬をゴシゴシと自分の手で擦る。ゴシゴシと……。

ちよっ！ い、痛いから！ そんな思いつきり擦られると肌が傷つくっ！

あまりの痛さにその手から逃れようとしたら怒られた。

なんでよ……。なんで私が怒られないといけないんだ。

理不尽な怒りに抗議の想いを込めて真正面から『兄ちゃん』を睨んでやった。

「な、なんで睨むんだ……。麻那……。兄ちゃん何か悪い事したか？」

見る間にシユンとなっていく『兄ちゃん』に答えたのは、私ではなかった。

「そんなの麻那が怒るのは当たり前でしょう。祐夜さんが力任せに擦るから、むしゃぶりつきたくなる可愛い頬が真っ赤になってるじゃないですか。痛かったよね？」

ていつ！ という音が聞こえそうなほどぞんざいに『兄ちゃん』の手を外した人 声から判断すると男の子みたいだ は、そつと私の頬に触れた。

さっきのぞんざいな扱いとは同じ手と思えないほど優しく。

まあ、それは言いとして、なんかセクハラ発言聞こえた気がするんだけど？

「ごめんっ！ ごめんな、麻那……。ばつちいものが触れたから、兄ちゃん綺麗にしようと力を入れすぎたみたいだ。本当にごめん……」

「ばつちいものってなんですか。とにかく、麻那の皮膚は繊細なんですから、気をつけてくださいね」

「そんな事司に言われなくても分かってるよ」

えーっと。そろそろ私は話しかけてもいいのだろうか？
どうやら会話も終わったみたいだし、問題ないよね？

「ところで……」

「ん？ どうした？」

「なーに？」

「あなたたち、一体誰ですか？」

「はっ！？」

「ええっ！？」

よし、ようやく言えたとスッキリした私。

「あのな、麻那？ もう一度兄ちゃんになんて言ったか教えてもらっていいか？」

「確かに私は麻那ですけど、『兄ちゃん』なんて人は知りませんし、

第一此処って何処なんですか？」

至極真面目に答えました。

すると『兄ちゃん』はわなわなと震えだし、ガシッと音がするほど強く私の両肩を掴んできた。

「ごめん、ごめんな麻那。兄ちゃんが本当に悪かったと思う。だからそんな意地悪な事言わないでくれ」

今にも泣き出しそうに顔を歪めて、なんとか搾り出したような悲痛な声で言う『兄ちゃん』。

そのあまりにも必死な様子に、自分が悪いわけでもないのに罪悪感を感じてしまう。

「ね、ねえ麻那？ まさか僕の事も知らない、なんて言わないよね？」

『兄ちゃん』とのやり取りに不安を感じてか、私の頬へ手を優しく添えて顔を横へと向けられたそこで、初めて声だけ聞こえていた男の子の顔を見た。

声からも思ったことだけど、やっぱり知らない人物だった。

こんな可愛らしい、『美少年』という言葉が似合う男の子は見覚えがない。

んっ？ と、何かが一瞬脳裏を掠めた気がするが、やっぱり見覚えがない。と、思う。

「ごめんなさい……。あなたの事も知らないわ」

「えっ……。嘘だよね？ 僕を驚かそうとしているんだよね？」

瞳をうるつると潤ませて、まるで捨てられそうになる子犬のな瞳

で、まるでこの世の終わりを迎えたような表情を浮かべている少年。また罪悪感を感じてしまうけど、それでも私の答えは変わらない。

「ごめんなさい。あなた達の事は全く知らないわ」

そう私が言った瞬間、少年は崩れ落ちた。

そこまでショックを受ける事なのかと、ちょっとオーバーリアクションじゃない？　なんて思ったのも束の間。

それから『兄ちゃん』と少年の怒涛の状況説明というか、思い出と
　　どうか彼らの『麻那』についての色々な話を　　大半が彼らが『麻
　　那』に好意を寄せているような話だったけど　　機関銃の如く喋り
　　倒してくれた。

お蔭で未だに声が耳に残っている気がする。

とりあえず頭が痛いと言っかけてこの部屋から追い出した。

ついでにそのまま寝るので、暫く部屋に入って来ないでとも嚴重に、
　　これでもかと言うほどきつく言っておいた。

渋々ながら彼らは部屋を出て行き、そうして漸く一人の空間を確保
　　できたのだった。

しかし。

一体自分に何が起きているのだろうか？

彼らの話を要約すると、私は家の階段から落ちたらしく偶々遊び
　　に来ていた少年　　司という名らしい　　が凄いい音がしたので来て
　　みると、階段の下で『私』が意識を失って倒れていたと。

幾ら待っても目が覚めない事から、家族であるお兄ちゃん　　祐夜
　　という名らしい　　に連絡をり、慌てて駆けつけたお兄ちゃんが部
　　屋に着いた時に私の目が覚めた……と。

最終的に彼らの中で、階段から落ちたショックで私は記憶喪失にな
　　ったという事で落ち着いたらしい。

なんだそれは？

私にしてみたらその一言に尽きる。

そんな簡単に記憶喪失ってなるもの？

それ以前に、残念ながら記憶喪失になんかなった覚えはこれっぽちもないのだ。

明日一日休めばまた仕事に行かないといけないし、休日でも若干溜まりつつあるネットでの自己啓発の講座も受けなくてはいけないし。

勿論、自分の家族構成やら、今の住所やら友達のこと、昨日食べた昼食等、とにかく色々な事を覚えている。

そんな私が記憶喪失？　ありえない、ありえない。

だったら、彼らは一体何がしたいのかって考えに結局行き着くのよね。

一番可能性が高いのが性質の悪い大掛かりなドッキリって事になるんだけど……。

それにしても彼らの演技は真に迫るものがありすぎたのでその線は薄いかと思った。

そうなると夢？　って言う事になるんだけど……。

五感がどうしても夢じゃなく現実だと訴えているのよね。

しかも夢となると、欲求不満なのか？　なんて思ってしまう出来事もあったわけで……。

あー、やめやめ！

幾ら考えたってどうにもならない以上、無駄。

ここは素直に寝てしまおう。

次に起きた時に、何も変わってなかったらその時に考えよう。

現実逃避大いに結構！

どうか夢でありますように……。

そう願いながらベッドに横になった私は、数分も経たないうちに何処かで聞いた事のある電子音によって寝る事を中断させられた。

もう、本当に誰かの嫌がらせとしか思えない。

暫くしたら鳴り止むだろうと思っていたけど、この音は一向に鳴り止む気配をみせなかった。

そのまま根気比べをしても良かったけど、そんな無意味な事をするぐらいならさっさと止めて寝る方が遙かにいい。

そうして音の発生源を探すとそれは簡単に見つかった。

ベッドの対面に置いてあるシンプルな勉強机に携帯が一つ置いてあり、そこからのようだった。

電話かメールの着信音が分からないけど、しかししつこいものだ。持ち主も、着信音の設定をもう少し短めにすればいいのにといいながら携帯を手にとった。

他人の携帯を勝手に見てしまう事に罪悪感を少なからず感じたけど、鳴り止まない電子音は頭に意外と響くので緊急措置として目を瞑ってもらおう。

誰の携帯かは知らないが、私が持っている機種と同じだったので操作には困らなかった。色まで一緒なのにはちょっと笑ったけど。

「ああ、メールなのね。ああでも、この状態でボタン押すと中身見る事になっちゃうなあ……。パソコンと違って未読にする事出来ないし。誰かに見られたって気付くよね、流石に。でもここは私の安眠の為に……。ごめんなさいっ！」

誰か分からないがとりあえず持ち主に謝ってからボタンを押した。そこで漸く電子音は消える。

よし、あとは待ち受け画面に戻しておけば大丈夫よね。

戻るボタンを押そうとして何気に目に入った文字に、押そうとした手が思わず止まる。

何故なら、送信者の名前に見覚えがあったからだ。

この広い世界、同名なんてありえる。ありえるけど、その下にある本文に私のフルネームとふざけた渾名が記載されているのは……。

それは、このメールが私の友達からで、私宛で間違いないということ……？

確かにこの携帯には見覚えがあった。ストラップも特につける派じゃなかったし、デコる事もあんまり好きじゃない。

だから見た目だけでは自分の携帯だなんてすぐに分かる筈もなかった。

でも、友達の名前がある事や私の名前がある事を思うと、この携帯はやっぱり私の携帯って事になる。

駄目だ。

なんか次から次へと考える事があり過ぎて上手く頭が働かない。とりあえず今はこのメールの内容を読む事にする。それで本当に私宛なのかを判断すればいい。

半ば自棄になりながら友達かもしれない人物のメールを読んだ。

……。

ああ、くそっ！

あまりな内容に、携帯を持っている手がプルプルと震える。

本当は携帯を投げつけたい、でもそれをしたところでダメージを受けるのは私なのだ。

何せこの携帯、間違いなく私の物だったから。

ああ、この怒りは何処へと向ければいいのだろうか？

友達 あかね 茜から送られてきたメールの内容は、怒りを覚えずには
いられない内容だった。

・ 3 (後書き)

本来は前中後編で終わる筈が、後編が思いのほか長くなりすぎたので数字表記へと変更いたしました。とりあえず、あと1話で完了予定です。今しばらくお待ちください。

・ 4 (前書き)

思いのほか4が長くなりましたので、ちょっと短くして2つに分けました。

『あなたの心の友、ううん、名実ともに大親友の茜ちゃんです！いきなりの事で驚いたと思うけど、なんとまなふいんはゲームの世界にトリップしちゃったのー！ きゃー！ 素敵！ ドンドンパフパフ！ ついでに紙ふぶきもパラパラって降らしちゃう！これから三年間逆ハー生活なんて羨ましいなあ。この・し・あ・わ・せ・も・の！ また感想聞かせてね まなふいんが誰を落とすのかすつごく興味あるけど、とりあえず大人しく待ってるから！じゃーね！』

相変わらずというか、なんというか……。

あまりにも高いテンションに、指が思わず削除ボタンを押そうとしていた。

それをなんとかギリギリのところで押し止める。

危ない、危ない。これを消す訳にはいかないのだ。

間違いなく、私がこの変な状況に追いやられた原因なのだから。

とりあえず、もう少し落ち着いて文面をよく読んでみよう。現状を理解しない事には、行動のしようがないし。

『ハロハロー！ まなふいん、元気してるー？』

……。

どうしてこう、人の神経を逆撫でるような文面が打てるのだろうか。

平時なら私はそのままスルーしていただろう。でも、この状況だと

苛立ちしか感じない。

わざとではないと分かってはいるけど……。

「とりあえず、ピュージョンのストロベリートルトを最低ワンホー
ルは奢ってもらわないと割に合わないわよね」

水曜限定販売で且つ、十五個しか作らないという結構レアもので、
知る人ぞ知るといふ代物だったりする。

勿論、予約は不可で店頭に並ばないと手に入らないもの。値段は五
千円するがその価値は十分にある。

それぐらいしてもらわないと絶対割に合わない。

オープン前から並んでいる茜を想像して、ほんの少し心がスツとし
た。

よし、この調子で読み進めよう。平常心平常心……。

……。

はい、瞬時に平常心なんか何処かに行きました。

流石、茜だね。うん。

とりあえず、一旦受信ボックスから待ち受けに画面を戻す。そうし
ないと速攻指が削除ボタンを押してしまいそうだからだ。

何せこれは大事な証拠なのだ。後で保護機能と外部メモリーにコピ
ーとついでに転送しておこう。

データだけじゃ心もとないから印刷もしておきたいな。

そんな事をつらつらと考えながら、指は違う操作をしていき躊躇う
事もなく、最後のボタンを押した。

ほんの数秒後になじみのある音　コール音がスピーカーから聞こ
えてくる。

異世界トリップなんて言っておきながら、普通に電話が繋がる時点
でおかしいだろう。

やっぱりどつきりを企んでいたか。

そう心の中で呟いた時に、コール音がなくなり馴染みのある声が能天気な言葉と共に聞こえた。

『ハロハロー！ あなたの心のアイドル茜ちゃんです』

レアチーズケーキもワンホール追加決定。

「かなりご機嫌じゃない、茜」

『まなふいんだってご機嫌でしょ？ 何せ逆ハーだもんね』
「……」

落ち着け私、平常心平常心。

「そうそう、その事で話があったのよ」

『うん？ 誰とラブラブになるのがおすすめって相談？ んー……。たまには冒険してもいいと思うからタイプの違う人とかどうかな？ それいいよね、うんそうしよう。私のおすすめはね……』

職場に持っていきけるようにマカロン五個追加ね。
忘れないように、あとで紙に書いておこう。

「おすすめしてくれなくて結構よ」

『それなら一体何の用なの？ ああ、相手の好みを知りたいって事ね。デートの場所？ 服装？ 食べ物？ おすすめの誕生日プレゼント？ あ、なんだったら今の全部教えようか？』

次は一体何を請求すればいいのか……。

流石にこれ以上食べ物と請求すると、体重が危険な気がする。
茜の言葉を右から左へと聞き流しながらそんな事を考えていたのだ

が、ここで茜を放置すると余計大変な事になると慌てて思考を切り替えた。

「とりあえずさ……」

『えっ？ 何？ ごめん聞いてなかった』

大丈夫、私も聞いていなかったからと内心で答えながらその事はおくびにも出さずに、あえて大きな溜息を聞こえるように吐いた。

『うわあ、ごめん。ほんとうにごめんっ！ 聞くから、次こそちゃんと聞くからもう一度お願いします』

スピーカー越しに聞こえる茜の声は、本当に悪いと思ったのか先程までの高く弾んだものとは変わっていた。

きつと電話の向こうでは、焦った表情で謝っているに違いない。簡単に思い浮かぶ辺り付き合いはかなり長いよね、と茜に聞こえないようにクスリと笑った。

何にしても、これで漸く会話は出来るようになったわけだけど。しかし……。

どうして普通の会話をする前からこんなに疲れるのか……。だからこそ茜とも言えるかもしれないんだけど。

私は気持ちを切り替えて、よく分からない頭痛のするメールの内容についてと、私のいる場所についての説明を求めた。

『うーん、そうかまだ馴染んでないんだ』

「は？ 馴染む？」

『あー、いやいやうん。これから最初から説明するからとりあえず聞いててくれる？ それと途中でのツツコミもなしで、質問等は説明終わってから受け付けるから、いいかな？』

それは突っ込む事が話の中にあるという事を堂々と宣言していないか？ そう思ったけども、それを指摘すると間違いなく話は進まないで今は触れず、了承の意だけを告げた。

『そうねー。そうなると私が『神々の庭園』に行つたところからかな』

何故そこで『神々の庭園』が出てくる？

『神々の庭園』とは茜が鼻肩にしているお菓子屋だ。私は行つた事はないんだけど、どうやらそこに行くには『資格』なるものがあるらしく、きつと一見さんお断りというお店なのだろう。

そう行つた理由で私は行つた事がないんだけど、何時かは是非とも行つてみたいと思つていた。

何せ、その作るお菓子は美味しい。

洋菓子から和菓子までと幅広あるんだけど、今まで食べた物全てが美味しかった。ほっぺたが蕩け落ちるとはまさにこの事だとい時でも食べる度に思う程だ。

茜が美味しいと思うものしか買っていないというのもあるかもしれないけど、それでもそのどれもが美味しい いや、極上に美味しいというのなら、そのお店の扱っているもの全てが美味しいと思つても仕方ない事だろう。

だから私は、未だに出会っていないであろうお菓子を自分の目で何時の日か選んでみたいと思つている。それが何時になるかは現状不明だけれども。

思考が逸れてしまったが、それが返つて良かったかもしれない。何せ条件反射でツツコミそうになる言葉が出なかったから。おかげで質問等は後でと言われた初っ端からそんな失態を犯さずにすんだ。

『滅多にないんだけど、気まぐれに福引をやるんだよね、あそこ』

年末年始とか、お盆の時期とか色々な所で定期的にやったりしているガラガラと回すアレの事か。

外れると分かっているながらも回すあのドキドキ感は、幾つになっても楽しいものよね。

『商品は都度都度違うんだけど、人によつたらとっても嬉しいものとかあつたりするのよね』

最近だとTVが多いよね、商品の目玉として。あとはお掃除ロボットとか羽根のないファン扇風機とか？

私はそれらより無難に商品券が嬉しいけど。そう言っても残念ながら、未だ嘗て当たった事がないけどね……。

『私も興味はあんまりなかったんだけど、折角だして思つて回してみたのよね。すると思わぬ大当たり！ まさかの特賞が当たっちゃったの』

特賞が当たったにしては声に嬉しさが微塵も感じられなかった。きつと知らないものだったのだろう。

それでも、特賞なんてつくからには変なものではないだろうから最悪売ってしまえばいいのではないだろうか？
そう思っていたんだけど……。

『特賞が異世界トリップって大当たりだと思う？ 思わないわよね？』

……は？

聞き間違い？ どう考えても聞き間違い、よね？ なんかそういう商品あつたつけ？ 私の知らない何かなんだろうきつと。なんだろうそれは？

まだ話し終わってないみたいだからこれは後で質問しよう。

『別に異世界に行きたいなんて全く思っていないし、私は今のままで十分だったんだけどなんか勿体無い気もしたからどうしようかなーって思ってたのよね』

異世界に行きたい……？

遊園地かサーカスカミュージカルか、よく分からないけどその招待券を貰ったって事？ にしては、何というか……。まあいいや。最後まで黙って聞こう。

『どうしようかと思ってたら麻那が『もう仕事疲れたー！ どこかに行きたい！ 休ませて！』って叫んでたのを思い出して、ここは麻那に譲ろうと思ったの』

わたし……？

いや、まあ年末年始とか繁忙月とか、鬱陶しい上司にネチネチ言われた時とか叫ぶけど、それは叫ばないとやってられないだけで別に切羽詰ったものとかではないのだけど……。

『こちらの希望は全て叶えてくれるとあったし、だったら楽しい世界がいいよね』と、私は色々考えたのよ。その結果思いついたのが『乙女ゲー』。あの世界に入り込んで主人公の立場になれば結構楽しいんじゃないかな』と

乙女ゲー……？

え？ なんだろう、ここから先は聞いたなら激しく後悔する気がする。私がそう思ったところで茜に伝わる筈もなく。

『そこで最近お勧めの『制服のリボンほどいたら……』の世界を元に色々私の意見を取り入れた世界を作ってもらって麻那に異世界

トリップしてもらいましたー！！　　っていう訳なの。分かった？
『

・ 5 (前書き)

年内に完了させようと思いましたができませんでした・・・orz
そして長くなったので今回も途中で分けてます。もうしばらくお付
き合ってくださいませ。

異世界トリップ……。

「えーっと、茜？」

『あー！ 嘘だと思ってるでしょ！』

いや、当たり前だろう。異世界トリップって何だ？ 何処の世界に福引で異世界トリップなんていう商品がでるの？

漫画や小説じゃあるまいし、そんな事簡単に出来たら今頃人類は宇宙に住んでる。いや、タイムトラベルも出来ているはずだ。

人をからかうにもってああ、そうか。どつきりがまだ続いているのか。

そういえばメールにも『トリップ』なんて書いてあったし。ここでその話題を出さないと説明にならないものね。

『まあ、実感湧かないのも仕方ないか。魔法とかファンタジーな要素があれば一発だったんだけど、あの世界には元からなかったからねえ、仕方ない。ねえ、麻那？ さっきの二人組とか何処かで見ただ記憶ない？』

色々と問いただしたい点は多々あるけれどもとりあえず、茜の質問を先に答えてあげるとしよう。

えーっと、さっきの二人組って言うてたよね？ それって私を誰かと間違えているあの人達の事だろうか？ いやしかし、何故それを茜が知っている？

やっぱりカメラなんかをこの部屋に仕込んで、様子を見ていたっていう事しか考えられないわよね。だったら知っていて当たり前。そして自分の失言に茜は気付いていない。

駄目ねー。詰めが甘い。騙すなら最後まで気を抜いちゃいけないのよ。

『この間貸した携帯ゲーム機のソフトのパケ絵。その左上と右下の人の顔と同じじゃない？』

本当は茜の失言から、騙しているという事を追求しようと思ったけどそれでは言い逃れされる気がして、私は仕方なく茜の言葉に従って借りているゲームのパケ絵を思い出す事にした。

もう少し強い証拠や、言質をとらないと相手を崩す事は出来ないからね。だから暫くは茜の掌の上で躍らせてあげようじゃない。

内心で、そんな事を考えながらパケ絵の記憶を掘り起こす。

昨日からやりだしたところだから、思い出すのはそれ程時間はかからなかった。流石に細部までは無理だったけど。

あー、確かにそんな感じだった気がする、る……。

記憶にあるパケ絵と先ほどの二人組みがあまりにも似すぎていて、思わず思考が停止しそうになった。

えっと……。あ、あれよね？ 記憶補正がかかっただけよね？

茜に言われてそう思ったってどうか思考が誘導されたというか。

やっぱり記憶だけじゃ無理があるのよ。ほら、人間の記憶ほど曖昧なものないじゃない。

そんな誰にしているのか分からない言い訳を脳内で喚いていると、それを見越したとでも言うようなタイミングで茜の声が聞こえてきた。

『どう？ 信じた？』

勝ち誇ったような声音に聞こえるのは私の被害妄想なのだろうか？

「た、たまたまよ。きっと原画氏が彼らを参考にして描き起こした

だけのよ。もしくはそっくりさんでも探して私に会わせただけのどちらかでしょ？」

「んー。麻那の現実を認めたくない気持ちは分からなくもないけど、さっさと認めた方が楽だよ？　んー……。仕方ないなー。その部屋に全身が映る鏡あったよね？　その前に立って自分の姿を見てみて？」

不可解な言葉に自然と眉根が寄る。

「……なんで？」

「その方が現実と認めやすいから、としか言えないかなあ」

茜の言葉に従う必要はないとは思うものの、このままの状態であるわけにもいかない。

白黒はつきりした方がいいだろう。　正直、気は全く進まないが。

「はあ……っ」

「溜息つかないの。さあ、早く」

あー、はいはい。鏡、鏡ね。

私は部屋をぐるりと見渡し、鏡を探す。

全身映る鏡っと、探しながらあれ？　と、おかしな事に気が付いた。次いでにんまりと笑んでしまいそうになるのをなんとか根性で抑える。

若干口元がピクピクしているがよほどカメラをズームにしないと気付かれないだろう。でも念の為に、不自然に見えないように顔を下へと向けておく。

この部屋の内装を知らない限りは、全身が映る鏡があるなんて分からない筈。

仮に異世界だとしたら、茜はどうやってそれがあると知っていたの

か？ まさか異世界の家や部屋の内装まで指定して作らせたところ？ そんな上手い話はないだろう。

なら答えは一つしかない。ここは異世界じゃないという事だ。

異世界でないのなら、部屋にカメラを仕掛ける事も簡単だし、ゲームの登場キャラに似た人物を探し出して演技等をお願いする事も可能だ。

あらあら。茜？ ボロが色々と出てきてるわよ？ もう少し上手くしなくちゃね。

さて、さつさと茜の指示通り鏡を見て、この茶番も終わらせるとしましょうか。

しかし、わざわざ全身を鏡で確認させて何がしたいのやら？

まさか、グロテスクな画像と合成させたものを映して私の姿が変わってるとでも言うつもりなのだろうか？

異形の姿になってるんだから、異世界だと信じるでしょう？ と。

あー……。

グロイのあまり得意じゃないから、軽めなものに止めてくれると助かるのだけど……。

そんな事を考えつつ鏡の前に立つと、ほんの少しの深呼吸をして心を落ち着かせると一気にカバーを捲りあげた。

カメラ越しの映像で見ていたらきつとおかしな動作に見えるだろうけど、そこはもう気にしない。

やっぱり心構えて言うか、何が出てても驚かないとぞという気持ちで臨まないと、茜が喜びそうな反応をしまいそうで嫌だからね。そうしてカバーを捲った先に映ったものは……。

「私……？」

『鏡なんだから麻那が映るのは当たり前でしょ？ 何か変な想像でもしていたの？』

くすくすという笑い声がスピーカー越しに聞こえてきたが、私の

意識は未だ鏡に囚われたままだ。

「確かに私だけど、でも……」

『ふふふ。驚いた？ 何せ十六歳の麻那が鏡に映っているんだものね。驚くわよねー』

成功したとでも言うような、楽しげな声。

茜の言葉通り鏡に映っていたのは今の私ではなく、まだ子供っぽさが抜けていない顔をした私だった。

それが十六歳だと自信をもって言えはしないけれど、明らかに若返っている私が映っている。

高校時代、ぐらいたるうか……。

『勿論はめ込み合成なんかじゃなく、今の麻那の姿だからね』

言おうとした事を先に言われてしまった。

だからと言って、鵜呑みになんかするわけがない。

『どうせ麻那の事だから、まだ信じてないんでしょ？』

……。見透かされている。

どうせなんて言われると、なんだか自分が疑り深い性格だと言われている気がして仕方ないけど、信じていないのは本当の事だから反論のしようがなかった。

「そうよ、悪い？」

なので無然として答えた。

『いいえ。麻那らしいなと思っただけで他意はないよ。まあ、そん

な麻那に分かりやすい説明をしてあげましょう。十六歳の麻那って髪の長さボブだったよね？」

茜の言葉に当時の自分を思い出す。

確かに、あの当時というか高校生活三年間は肩より下に伸ばした事はなかった。

『でも、鏡に映ってる麻那の髪の長さはどう？ ボブじゃないよね？ 赤に近いブラウンの色に背中の中までの真ん中までの長さ。それって今の麻那の髪形だよね？』

そう、だ。

顔は今の私ではないけれど、髪に関しては今の私と同じだ。

『決定打としては低いかもしれないけれど、どう？ やっぱりまだ無理かな？』

「そうね……。流石に髪形だけで判断は付けられないわね」

『そっかー。そうだよー。麻那だもんねー』

「ちよつと、それどういう意味？」

『んー？ 別に？ こっちの話。そんな事よりも、本当はもっと麻那が納得する形で説明したかったんだけどあんまり時間がなくてね。ほら、異世界通話だからなんか世界の制約？ 干渉？ よく分からないけどそういった諸々の関係であんまり通話できないのよ』

「はあ？ 何それ？」

『いや、うん。私だってそう思うんだけどこればかりはねー。単なる人間の私ではどうしようもないのよねー』

ばれそうになったから、一旦体勢を立て直そうとしているのだから？

「そんな事言つて誤魔化して、逃げようとしているの？」

『逃げ……？ あー。確かに麻那の状況を思えばそう捉えられても仕方ないのかな……』

困ったなあという呟きが微かに聞こえた。

思わず漏れ出た茜の本心だろう。

何も困る必要はない。そこは素直に騙していたと認めればいいだけだ。

しかし茜は何も言わない。

どう言い繕おうか考えているのだろう。

今のところ私から話す事は何もないので、必然と無言状態になる。

茜が喋らない限りこのままの状態が間違いなく続くだろう。

正直、電話していて無言つて気まずいというか何か話さなくちゃいけないという強迫観念に駆られてあんまり好きじゃないのよね。

んー……。さて、どうしよう。

なんて悩んでいたけれど、その悩みはそれから直に解決された。

『ねえ、麻那』

今までとは全く雰囲気異なつた、真剣な声音だった。

白状するに足るはかなり真剣すぎる気もしたけれど、それ程気にする必要もないかと会話に思考を切り替えた。

「何かしら？」

『私、今まで麻那に嘘をついた事あった？』

なんだ、白状するわけではないのか……。

「んーそうね……。何回かはあったと思うけど」

『えっ！？ あー……。で、でも騙したりはしていないわよね！』

？
』

どうやら茜は私に対してついた嘘がばれていないと今まで思っていたらしい。

まあ私からもわざわざそれを指摘する事がなかったから当然かもしれないが。

何せその嘘と言うものが全て、私を傷つける為のものではなく守る為についたものだったからだ。

しかも私が自分から気付いたというのではなく、周りからほとぼりが冷めた頃ぐらいに聞かされるというか、違う話等をしている時にすっかり分かるというパターンだったりする。

どれだけ茜が嘘をつくのが上手いのか、それとも私がただ単に鈍いだけなのかは分からないけど。

ほとぼりが冷めた頃に分かるものだから、わざわざ話を蒸し返すのも躊躇われて結局そのままという状況で今までのきたのだ。

だから茜が知らなかったのも無理はない。

「そうね。茜がついた嘘は全て私を守る為についていたものばかりだから、不愉快な思いにさせられた事はないわね」

『麻那……』

茜の声がちよっとしんみりとした。

思わぬ言葉に感動でもしたのだろうか？ いや、感動させるような言葉を言ったつもりはないから違うかな。

「まあ、それはおいといて。結局何が言いたいの？」

『だ、だからね。これはドキリでもなんでもなくて現実の事なの。受け入れがたいかもしれないけど、異世界トリップを現実として受け入れて！』

「いや、さすがにねー。そこは受け入れられないと思うのよ。だっ

て、非現実的じゃない？ フィクションの世界ならありえるだろうけど、流石にこの歳だし現実と夢はちゃんと区別ついてるわよ？
しかもさっきの話の流れから考えるとこれも私を守る為に行われた事ってなるのよね？」

このままだとまた、堂々巡りの押し問答になりそうだ。

『…………ごめん』

茜はそうだよと肯定もせずただ一言、苦々しい声で言ったただ肯定すればある程度話はスムーズに…………とは行かなくても、ある程度の進展はするとは思っただけだね。

でも、それが茜なんだよね。

「はあっ……………」

『麻那……………』

なんでそんな悲愴な声で私の名前を呼ぶのよ。絶対勘違いしてるわね、茜の奴。

「分かったわよ」

『え？』

「だから、その異世界トリップっていうのを信じてあげるって言ってるの」

『麻那っ！…！』

「あーはいはい。それで、私は何時まで此処にいればいいの？ 流石に仕事もあるからあんまりこっちにいるわけにはいかないんだけど」

続きそうになる茜の言葉を強引に切って私は気になる点を聞いた。これが本当に異世界トリップであろうとなかろうと、この際それは気にしない。いや、気にするべき事だと思うけれども大事な事はそれではない。

一体何時までそれを続けなければいけないかとう事だ。

何せこちらは社会人。そんな簡単に長期休暇など取れるはずもない。精々病欠と偽ってなんとか一週間が限度だろう。流石にそれ以上は手術入院等ではないと無理だ。

勿論、無断欠勤なんて論外。そんな事をすれば間違いなく解雇だ。このご時世、再就職はそれ程簡単ではない。無職で生きていけるほど世の中楽ではない。失業手当を当てにても勤務年数は短いから期間も大してないだろうし、解雇理由が再就職に響く可能性もある。だから期間の確認をしたのだ。

『……かん』

あまりに小声だった為か、よく聞きとれなかった。

「ごめん、もう一度言ってくれる？」

『……年間』

相当言いたくないのか、今回も小声だ。全くもって埒が明かない。

「もっと大きな声で、はっきりと言ってくれる？」

『……。三年間、三年間です！』

「はあっ!？」

茜の様子からまさかと思っていたが、流石にそんなに長い期間だ

とは考えていなかった為思わず驚きの声が出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8902u/>

少なくとも私は望んでいない。

2011年12月29日22時49分発行